

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12179

研究課題名（和文）主体的・対話的な学びのための哲学・倫理学教育の実践的研究

研究課題名（英文）Practical research on teaching philosophy and ethics for proactive and interactive/dialogic learning

研究代表者

阿部 ふく子（Abe, Fukuko）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：30781520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、今日の教育において要請される「主体的・対話的な学び」を実現していくために哲学がどのような理論や実践方法を提供しうるかという問題意識の下、現代のP4C、西洋哲学史（ヘーゲル、ローマン、プラグマティズム、メルロ＝ポンティ、ブルーメンベルク、ウリ、アド等）の各思想から特に主体性と対話に関わる議論を取り上げ、対話を通じた主体の変容の有り様をさまざまな角度から考察した。さらに、小・中・高等学校、大学、地域と連携して哲学対話を実践し、フィールドで得られた具体的内容を文献研究とも照らし合わせた上で、対話の哲学を構築するにあたって必要となるコレクティブ概念の分析をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「主体的・対話的で深い学び」について、教科教育学的観点からの研究が多いなか、本研究では当該コンセプトが根源的に担う哲学的意味の射程を明らかにした。特に、学校や地域との連携体制のもとで、理論の適用と実践からのフィードバックという二重のアプローチを通じて新たな哲学教育の基盤となる考え方や方法論を構築できたことは意義深い。これにより、哲学がその本性上そなえる主体性と対話的思考を教育実践へとつなぎ、共生社会に求められる人間の思考能力の形成のためにこの学問が果たしうる役割とその重要性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, based on the question of what kind of theories and practical methods philosophy can offer to realize the "proactive and interactive learning" required in today's education, we will (1) focus on discussions related to the contemporary P4C (Philosophy for Children), the history of Western philosophy (Hegel, Lohmann, Pragmatism, Merleau-Ponty, Blumenberg, Oury, Hadot, etc.), and (2) discuss the nature of the transformation of the subject through dialogue from various perspectives, and examined the nature of transformation of the subject through dialogue from various angles. In addition, (2) we conducted philosophical dialogues in cooperation with elementary, junior high, and high schools, university, and local communities, and analyzed the concept of collectif, which is necessary for constructing a "philosophy of dialogue," by comparing the specific content obtained in the field with the literature study described in (1) above.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 倫理学 Philosophy for Children

1. 研究開始当初の背景

昨今我が国において、義務教育、高等教育、成人教育すべてにわたり「主体的で対話的な学び」というアクティブな態度や方法が強く求められているのは周知のとおりである。とりわけ小・中学校では2018, 2019年度から道徳が教科化されているが、そこでは「考える道徳」「議論する道徳」「主体的・対話的で深い学び」が明確にキーワードとして掲げられている。

哲学・倫理学は、論理的・批判的思考力や判断力、探究心の形成を担う点で、年齢・立場・場所を問わず幅広い学びの領域を根底から支える学問であるとともに、ソクラテスの哲学に遡れば主体的・対話的思考をその原点としていることから、現代に求められるアクティブな学びの実現に向けて本質的かつ重要な役割を果たしうるとは明らかである。しかし我が国の現状として、哲学・倫理学の専門研究と教育実践研究はおよそ乖離した状態にあり、専門研究の発展や充実に比べて哲学・倫理学の教育実践そのものに関する問題意識の共有や議論形成はいまだ不十分で途上にあると言わざるをえない。すでに1995年にUNESCOから世界の哲学者有志によって出された「哲学のためのパリ宣言」では、これからの民主主義社会における哲学の責任と使命が表明されている。この宣言で語られる哲学は、単なる知識ではなく、自由な議論、自立的な思考、開かれた心、多様性理解、寛容さ、市民としての責任、判断力などを養成する役割を担うものとして強調され、これらのコンピテンスの養成を根底から支える哲学・倫理学教育に実践的な観点を導入する必要性が説かれている。我が国は他の先進国に比べ、哲学・倫理学の基本的理念や方法が学校教育から成人教育にいたるまで明確な形で導入され根付いているとは言い難い状況にある。今日求められている「主体的で対話的な学び」を実現していくために、哲学・倫理学は具体的にどのような理論や実践方法を提示するべき/しうるだろうか。以上が本研究開始当初の背景と問題提起である。

2. 研究の目的

以上に述べた背景と問題意識により、本研究では大きく分けて次の二つの研究をおこなうことを目的とした。

研究 Ⅰ：欧米の哲学・倫理学および哲学・倫理学教育研究から特に主体性と対話に関する議論を取り上げ、有効な概念・事例・方法論等を体系的に考察する。

研究 Ⅱ：小・中・高等学校、大学および地域との一定期間の継続的な連携により、Ⅰの研究で得られた内容の実践的な適用とフィードバックを試みる。

本研究は、このように文献研究と実践的研究を組み合わせることによって、我が国の制度や文化に根ざした新たな対話実践の哲学を構築することを最終的な目的とする。

研究 Ⅰに関して、たとえばアメリカとドイツでは1970年代頃から哲学・倫理学教育研究が進み、当該分野のための国際・全国学会(例えばアメリカのIAPCやドイツのForum für Didaktik der Philosophie und Ethikなど)、学術雑誌、大学附属のセンターから発信される情報が充実している。また哲学・倫理学教育の専任ポストや講座も多くはないが存在する。本研究ではこうした国々の研究体制に支えられた先行研究から、特に主体性と対話に関する議論を出来る限り多く参照し、論点を整理していく。M・リップマンが創始したアメリカの「子どものための哲学」(Philosophy for Children=P4C)についての研究は近年日本でも紹介や導入が進んでいる。しかし、先行研究の体系的なフォローなどを含め全体的に過渡期の段階にあり、P4Cの理論をどのように日本の教育制度の中で受容可能なものに変換・応用し、「主体的で対話的な学び」のモデルとして具体的に提示していけるかという課題はつねに残されている。本研究では、研究 Ⅱの核となる学校等との連携体制を整えた上で、理論の適用と実践からのフィードバックという双方向によるアプローチを通じて新たな哲学・倫理学教育の方法論を構築することを試みたい。上記1でも触れたように、専門分化した哲学・倫理学とその教育研究とが内容的にも制度的にも乖離した状態にあっては、生活、社会、政治、文化、世界情勢と学問との接点も曖昧なままとなる。本研究では、哲学・倫理学がその本性上そなえる主体性と対話的思考を教育実践へとつなぐことで、共生社会に求められる人間の思考能力の形成のためにこの学問が果たしうる役割とその重要性を提言したいと考えた。

3. 研究の方法

研究 Ⅰの具体的な内容としては、哲学・倫理学教育における対話的方法と主体の形成を実現しうる具体的な方法論とその根拠を探るために、西洋哲学の先行研究および実践的取り組みの中でも特に下記二つの論点について考察・分析し、文化的・制度的差異も考慮に入れた上で、日本の教育制度の中でも理解・実践可能な形としてモデル化し提示することを試みた。

の論点ないし問いとして考えたのは、哲学・倫理学における対話と思考の本質的な関係性を根拠づけ、それを実践的に応用・遂行可能な方法として提示する際に、どのようなファシリテーションの態度や技法が求められるか、ということである。哲学・倫理学は、ソクラテスにその起源を求めるならば対話教育と切り離せない。ソクラテスの哲学探究は対話を通じた思考の中で展開される。以来、哲学史の中でも対話と思考の深い関係性は繰り返し考察の対象となってきた。本研究ではまずこの思考と対話の本質的な関係を哲学理論に即して整理する（特にその実践的要素が欧米の先行研究によって注目されているソクラテスの問答法、プーバーの自己-他者関係を焦点とした対話的思考、デューイによる行動の論理学など）。次に、この歴史的・理論的研究をベースに対話の実践方法の構築をめざす各議論について考察する。先行研究として中心的に考察するのは、ファシリテーションの介入度合いに従い、「探究の共同体」方式のP4C研究（リップマンやハワイ p4cHawaii 等）と、ソクラテス的対話の研究（Gisela Raupach-Strey, *Sokratische Didaktik*, Berlin 2012）である。これらの考察を通じて、哲学本来の対話性を活かした対話的学びの方法論の体系を提示したいと考えた。

さらに、哲学・倫理学の歴史や理論（＝知識）と主体的思考をどのようにして有機的につなぐことができるかという問題も提起しておきたい。対話そのものはすでに主体的な行為である。しかし、初中教育の学習指導要領では道徳の内容項目が、高等教育では哲学・倫理学の歴史や理論が既存の教育内容や学問体系としてあり、これらの内容全体を対話のみでカバーすることは困難であるどころかむしろ知識面の重要性を軽視する結果を招きかねない。本研究ではこのような知識と主体的思考の分断それ自体と融合の可能性について考察するために、「言語史」（Lohmann）、「概念史」、「メタファー学」（Blumenberg）、「コレクティブ」（Oury）の考え方にも着目した。

研究 の具体的な内容としては、研究 で得られた対話と主体性を導く方法論を実際に学校やワークショップで実践的に適用することを試みたが、そのさい、小・中・高等学校、専門学校の教科（道徳、倫理、総合学習、生命医療倫理に絞る）教材、学習指導要領や学習レベルなど既存の制度や状況に柔軟に適合させた形を現場教師との連携のもとで模索し実施した。研究代表者はすでに本研究課題を開始する以前から、所属大学附属小学校の道徳授業看護専門学校の生命医療倫理の授業においてハワイ P4C 方式の哲学対話を継続的に実施し、そのさい担当教師の方針や授業研究とこちらの研究内容とを細かい点まで摺り合わせる作業を重ねてきた。そこで培ってきた経験と方法を本研究でも活かし、哲学・倫理学という学問においてはその研究され抜いた教育方法を外から一方的に持ち込むのではなく、哲学の本質である対話的・主体的思考を引き出すための方法として効果的に用いながら、既存の制度の中で求められている内容を新たな学びの感覚へと導きたいと考えた。また、学校での実践で得られた効果や反省点にも再び考察を加え、研究 での先行研究をアップデートする論点や方法を明らかにする。研究 で得られた成果は、関連学会や書籍等で発表した、「主体的で対話的な深い学び」としてのこれからの教育に貢献できたものと思われる。

4．研究成果

【2018年度】

当年度は研究 として、まずアメリカのP4C研究から、哲学探究のコミュニティ（Community of philosophical Inquiry）における権威と主体の関係性について考察した。また、言述や対話における思考・存在・言語の関わりについて究明したドイツの言語哲学者 Johannes Lohmann のテキストの翻訳（次年度以降も継続）と解題を手掛けた。さらに、フランスの精神科医 Jean Oury による「コレクティブ」の概念に注目し、個々人がもつ無限のファクターや特異性を尊重することと全体/集団を形成することとが有機的に成立しうる次元を探った。

研究 としては、新潟大学教育学部附属新潟小学校や他の公立学校と連携し、哲学対話を導入した道徳授業の可能性を実践的に模索した。そこで問題となった主な論点は、発達段階に応じて哲学対話の形をどのように変えるか、「課題とまとめ」という枠組みや学習内容・教材など権威づけられた要素があるなかで、対話的思考の自由さ・柔軟さにどのような意義を与えるべきなのか、哲学と道徳の接点と根本的な違いについてなどである。他にも、対話における「聴く」という行為の可能性や、個と全体のダイナミズムについても検討した。また、大学では哲学対話とメタ哲学対話を繰り返し実践し、ファシリテーションのあり方を中心に反省的な考察を重ね、単なる方法には還元できない、存在に深く根差した対話的思考の可能性を見出した。

【2019年度】

当年度は、まず研究 において、哲学対話のメンタリティとして欠かせない「知的安心感（Intellectual Safety）」の生成を臨床心理学的・教育学的・哲学的アプローチにより解明することを試みた。特に Th. Jackson や J. Seikkula の研究を参照し、対話における知的安心感が、不安の排除ではなく、現れ、傷つきやすさの相互開示、真理を語る勇気＝危うさの引き受けといった、不安定な主体性の活動性により成立している点に注目した。また前年度に引き続き、言述におけるロゴスの根源的作用を考察するために、ドイツの言語哲学者 J. Lohmann のテキストの翻訳を手掛けた。

研究 としては、前年度に引き続き新潟県内の小・中・高等学校、地域と連携し、哲学対話を導入した道徳教育、課外授業、学級・学校・コミュニティづくりの可能性を実践的に模索した。前年度に比べて実施回数や連携校、参加人数が飛躍的に増加したことは、本研究活動の社会貢献上の一定の成果であると言える。当年度のフィールドワークで特に重視した課題は、知的安心感の経験的な諸条件を分析することである。結果的に、主題への親密度、正解がない問いの開放性、発言義務がないことなどからくる心理的自由さが大きな要素であることが確認されたが、制度面のみならず、人間関係やファシリテーションといった内面的・技術的・存在的な側面に基づく知的安心感についてもさらに分析を加える必要があると考えた。

【2020 年度】

当年度は、まず研究 において、Th. Jackson らによる p4cHawaii の理念と実践、D. Pritchard による刑務所での哲学対話プログラムの活動展開に注目し、「哲学探究の共同体」が現実のコミュニティ形成のみならず人間形成に与える影響とその根拠について検討した。また、J. Oury の概念であり実践「コレクティブ」から、対話にもとづくコミュニティのあり方について考察した。また前年度に引き続き、言述におけるロゴスの根源的作用を考察するために、ドイツの言語哲学者 J. Lohmann のテキストの翻訳を手掛けた。

研究 としては、前年度と同様、新潟県内の小・中・高等学校、地域と連携し、哲学対話を導入した道徳教育、課外授業、学級・学校・コミュニティづくりの可能性を実践的に模索した。コロナ禍により、実施回数は前年度に比べ少なかった。当年度のフィールドワークで特に重視した課題は、「探究の共同体」意識の醸成である。具体的には、学校側の要請もあり、生徒主体での校則の見直しに向けた哲学対話、道徳科目においていじめ問題を主体的に考えるための哲学対話の設計および実践をおこなった。また、地域でこれまで展開してきた哲学プラクティスの活動を論文にまとめた。

【2021 年度】

当年度は、まず研究 において、ワシントン大学の P4C 実践者・研究者である J・M・Lone らが展開する 問い を重視した道徳哲学の教育プログラムに注目し、読み物道徳を人間の歴史的事実や教室で起きている現実結びつけて主体的に考える時間に転換するための問いかけの手法を特に検討した。また、概念の生成とメタファーの密接な関係を探るために H. Blumenberg のメタフォロロギーを参照し、哲学実践との接点を論じた。さらに、前年度に引き続き、言述におけるロゴスの根源的作用を考察するために、ドイツの言語哲学者 J. Lohmann のテキストの翻訳を手掛けた。

研究 としては、前年度と同様、主として新潟県内の中学校・高等学校、地域と連携し、哲学対話を導入した道徳教育、課外授業、学級・学校・コミュニティ形成の可能性を実践的に模索した。当年度より新たに加わったプロジェクトとしては、コンテンポラリーダンスの世界とのコラボレーションが挙げられる。また、日本哲学会の哲学教育ワークショップを通じて道徳教科書と哲学対話の関係性について検討したほか、子どものための哲学図鑑の執筆にも参加した。

【2022 年度】

当年度は、まず研究 に関して、日本倫理学会シンポジウムにて「哲学と対話のアイロニー」と題した発表をおこない、近代哲学における対話の否定的な側面にあえて注目することから、哲学と対話の実践を捉え直した。概要としては、まず近代の対話的思考に対する P. Hadot と M. Buber の批判の論点を確認し、その上で、啓蒙思想における哲学者の語りのずれと転倒に注目したヘーゲル『精神現象学』(1807 年)に立ち返り、弁証法的視野が必然的にそなえる「隔たり」ないし「ずれ」の構造について検討した。さらに、対話における哲学(者)の立ち位置としての「アイロニー」に目を向け、ソクラテスのアイロニーとヘーゲルの弁証法の接点と差異も見いだしつつ、対話行為と哲学の距離感について考察した。以上により、哲学と対話のアイロニカルな関係を現代の哲学教育の文脈に位置づけなおすことを目指した。また研究 では前年度に引き続き、J・M・Lone の「モラル・インパルス」を翻訳し、公開した。

研究 としては、前年度と同様、主として新潟県内の小・中学校、高校、地域と連携し、哲学対話を導入した道徳教育、課外授業、学級・学校・コミュニティ形成の可能性を実践的に模索した。当年度では特に、東京都の高校で哲学対話の放課後講座をおこない、フィールドワーク先を拡げることができた。

【2023 年度】

当年度は、まず研究 の主たる成果として、論文「プラグマティズムとコレクティブ：哲学対話の「ままならなさ」がもたらす哲学的フィードバック」を発表した。概要としては、哲学対話の「ままならなさ」が持つ意味やそれとの向き合い方を考えるために、次の 1) 2) の論点に着目し検討をおこなった。1) 哲学探究の共同体を内部から支えるプラグマティズムの認識論的可謬主義を取り上げ、その趣旨と適用可能範囲について確認した。その際、筆者が関わった哲学対話の場で起きた特徴的な出来事の内実についても振り返った。2) フランスの精神科医 Jean Oury による対話的な精神医療の理論と実践を参照し、特に「制度を使う精神療法」というコンセプトに着目することで、可謬主義の範囲では捉えがたい対話上の「エラー」が持つ意味について考察

をおこなった。以上1)2)を通じて、実践上で生じる哲学対話の「ままならなさ」を単なるエラーとしてではなく実質的なものと捉えてさらなる哲学的思考につなげるための一つのフィードバック方法を提案することができたと思われる。

研究 としては、前年度に続いて、主として新潟市内の小学校・高校と連携し、哲学対話を導入した道徳教育、課外授業、学級・学校・コミュニティ形成の可能性を実践的に模索した。この成果は研究 の論文にまとめられている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 阿部ふく子・貝沼千尋訳	4. 巻 19
2. 論文標題 ヨハネス・ローマン「ヨーロッパの概念史と一般概念史に照らしてみる理論と実践」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 知のトポス	6. 最初と最後の頁 1-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 阿部ふく子訳	4. 巻 18
2. 論文標題 ジャナ・モア・ローン『モラル・インパルス：中学生と話す道徳哲学とジェノサイド』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 知のトポス	6. 最初と最後の頁 35-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部ふく子	4. 巻 73
2. 論文標題 哲学教育ワークショップ「小・中学校の特別の教科『道徳』の教科書の使い方を考える」報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 93-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部ふく子・渡邊京一郎訳	4. 巻 17
2. 論文標題 ヨハネス・ローマン「西洋人と言語の関係：言述における意識と無意識的形式〔四〕」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 知のトポス	6. 最初と最後の頁 75-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部ふく子・渡邊京一郎訳	4. 巻 16
2. 論文標題 ヨハネス・ローマン「西洋人と言語の関係（言述における意識と無意識的形式）」〔三〕翻訳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『知のトポス』	6. 最初と最後の頁 167-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部ふく子・渡邊京一郎（訳）	4. 巻 15
2. 論文標題 ヨハネス・ローマン「西洋人と言語の関係（言述における意識と無意識的形式）」〔二〕翻訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 知のトポス	6. 最初と最後の頁 205-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部 ふく子・渡邊京一郎	4. 巻 14
2. 論文標題 ヨハネス・ローマン「西洋人と言語の関係（言述における意識と無意識的形式）」〔一〕翻訳・解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 知のトポス	6. 最初と最後の頁 49-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部ふく子・劔仁美
2. 発表標題 制度と実践のあいだで考える道徳授業
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 阿部ふく子
2. 発表標題 弁証法から対話へ：P4Cからヘーゲルに立ち返ってみる
3. 学会等名 新潟哲学思想セミナー（Ni iPhiS）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部ふく子
2. 発表標題 哲学と対話のアイロニー
3. 学会等名 倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部ふく子
2. 発表標題 概念の生成と隠喩の関係
3. 学会等名 東北哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部ふく子
2. 発表標題 「コレクティブとプラクシス：実践の認識論（エピステモロジー）」
3. 学会等名 新潟哲学思想セミナー（Ni iPhiS）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部ふく子
2. 発表標題 「哲学コレクティブ：コレクティブについてのコレクティブ」
3. 学会等名 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属「共生のための国際哲学研究センター（UTCP）」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部 ふく子
2. 発表標題 コモンセンスと哲学
3. 学会等名 新潟哲学思想セミナー（Ni iPhiS）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 小玉重夫監修、田中伸 / 豊田光世編集	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 258
3. 書名 対話的教育論の研究：子どもの哲学が描く民主的な社会	

1. 著者名 河野哲也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 あかね書房	5. 総ページ数 104
3. 書名 こども哲学図鑑	

1. 著者名 新潟大学人文学部附置 地域文化連携センター編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 292
3. 書名 大学的新潟ガイド	

1. 著者名 M・R・グレゴリーほか編、小玉重夫監修、豊田光世・田中伸・田端健人 訳者代表	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 子どものための哲学教育ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------